

## 「浅間記」(翻刻)

## 東京桂の会

## 「浅間記」

をちこち人のみやはとかめぬとありしむかしよりいまでも猶たえやらぬ浅間山の煙おとろくしう立のほり夏ふかきみとのりの空も見えわかす あつき日のかけをさへおほひて遠方の里々も山なすまで砂ふりつみつゝ なりとゝろみはいつちもくゆすりみちぬ まして此ちかきわたりに住侍る人々いかゝおとろしくやはなき 岩ほも山もくつかへるへうとゝろく さることさへあるに とすればあらましき風のきをひに雨のあしけく いとゝひゝきをませとにや神さへなりて明くるゝ 日かすにそへて山はいとかめしうなりみちつゝ立のほる煙のうちに いかつちひらめき夜はみねよりほのほもえあかり みる人のおもひさへけつきたなく 何わさしいてんともおもはず たゝ此うれへをのみいひあはせて日比になりぬ 心しつかにうちまゝとむ夜なくて明ぬれば水無月廿八日 けふはことに空のけしきも物すこくうち詠らるゝにいよく くら雲おほひ雨の降りけは戸さしかためつゝ物の色も見へわかす 神なりみちて落かゝりぬべくおもほゆるに 石のまじりてふりにふると

すくるはとに神すこしなりやみて雨のあしもしめるやうなれと 名残いとゝおそろしく山は鳴わたりゆすりみちつゝ波風のあらき舟の内にゐたらん心地するにと いと物むつかしくたへかたくおほゆ 皆人々もかゝるところにいかてかあらむ いつちへもくはや立さり給へかしなといふちかき比もかくてしも事なくしつまりき 彼山のすそに住人たにいまた立さはきはへらぬに ちかきわたりといへとも道のほとも六七里やへたゝりたらん さるを今立のき侍らはよの人々の心をもさはかせ ことゆへなくしつまりて立かへりこむうしろ手もいかゝあはたゝしからん さりとほかの麓の人々も立のき侍ると聞おりにこそ とまかくもおもひたゝめ なといふを聞につけてもけにさもあるわさなかゝゝる事にさはかれて此山を立てなはいと心あさしとや世の人にもいひおもはれん などとさまかうさまいともわひしく思わつらひつゝ月もかはり秋にもなりぬけふはすこし空もはれておそろしきものはふりこねと山はいやましになりひゝき何事の思ひにか たちのほるけふりもうすろかにはるゝとうちなひき秋たつ空の色もいとゝめにはさやかに見へす いつしか吹かへぬる風のをとのみ袖にしられて

今朝ははや秋とはかりにふく風のほのかなるゝも先そ身にしむ

いふにそいかてさはあらんといへは あれ見給へとて戸をすこしをし明ぬるまゝ くひさしのへてみるにけに浅ましうおそろしともいはんかたなく そゝろさむくさへ成てきしかたゆくすゑ思つゝけらる つみふかき人のいたるとつたへきゝにしちごくとかやいへるもかゝる所にやあらんさてもいかはかりのむくひにてうつゝの人の見ることはかゝることのなき日比たに みしふる里の恋しうおもひいつる折々侍しか いにしへも今もやんことなきおほん方々さへしも身のすくせにまかせて とをきくにさるは日のもとの外までもおほし立給ひぬるを ましてかくたとしへなくはかなき身のほとよ いかなる山の奥谷のそこにも任はつへくとおもひのとめしか此ころは何事もおもひたまへやらず たゝふるさとにひとりものし給ふ母のみ恋しうおもひいてられて

恋しさになかむる空もかきくれて猶ふるさとそとをさかりぬる

心ほそく思ひつゝくるに猶あらましく音たてゝいしさへまする雨のあし あたるところまことにとをりぬへうはためきおつ たれもくゝ心たましめなくゝ男をうなみたれ立さはく ちかき比も山のなりひゝきし事はありしか ともかく石などのふりし事は聞もつたへす などとしおひたる人もあさましくめつらかなる事といひあへり やうく暮前裁のかたみいたしぬれば此日ころふりにし雨に萩もすゝきもうちふし木立たていしなとも折れかへりぬへきけしきなり かゝる里はなれたる任家なれとあかしつれば時につけつゝところにつけて中々哀もまさりめつらしくおかしき事も見きゝるを りくは都の人の音つれもまたれしか此比はかの煙の外に立まする人もなく 松風のことゑさへおとにけたれてきこえわかす かすしらすなけかしき事のみにてあかしくらしぬ 七日にもなりぬれとほしの逢瀬もいとゝおほつかなき空のけしきなりしに此垣ひとへをへたてゝ物したる人の 夕つかたとひきておなしさまのこといひてなけく むかし今の物語なとしつゝかゝることに心まとはしくし侍れとせんかたなし 今宵は歌ひとつゝよみて星にたてまつり侍らんとて題をさくりてみつから 待七夕舟出していそくあふ瀬のつな手纏くるゝ待さもほしやわふらん

このすゝめし人の 七夕雲

一年をへたてし中のうき雲のうらみもはるゝほしあひのそら

正永か 七夕霧

しのふへき契なりしをこよひとてあまの川きりたちなへたてそ

手向けの草々もうちくしぬれはいとゝこしおれたることの

みいひつゝ暮ふかくなり行まゝさもすまじうなりひゝく人々いかゞ成ゆくことゝて らうに出て山のかたをみやればよるは猶こゝもとにちかつく心地して嶺もふもともひとつにほのほもえあかり みねよりつたひてまろき火のおちかゝるまでみゆ わなゝかれつゝこはそもいかなる物の火になりたるにかあらんとゝへは かたへの人のいふやうあれはぬわうの石のほのほにつゝまれて立のほりしかおつるにやあらん などいふにいよくおそろしくてさすかに見もやらすひき入ぬれと 見しものゝめにつきそひたるやうにてうちふしぬれと夢をたにみす 秋もまたあさきほどなれば夜もはや明はつるに 八日今朝は猶空もうちくもり日かけも見へす いとゝむねもあく時なし いづるいきのいるまをたにまたすいみしうなりひゝけは あるかきりここにつとひてさかしき人なく いかなるつみをかしてかくおそろしきめをはみる事ぞ 神はあきらかに仏はしひ第一にましまさは此うれへしつめたまへとて 空をあふき地をたゝきて念たてまつる 何かしらをさなかりし時 山のあれし事は侍しか はつかあまりしてしつまりき かく月日ふる事いまたしらす ちかきころほひもいつとかやいへるとしにもかゝる事はへりしか おほやけにもきこしめしたてまつらせ給ひてさるところくのみやしるにみてくらさゝけさせ給ひ あるはげんある僧のかきりしてたふとき

立のほりつゝ我来しかたもわかす 此山まであらまじき疲のうちよするやうにみゆ 鳥のわたらんよりもはやく あまたなかれわたるものさたかに見もやられす かくて世はつきぬるにやといとゝ氣のほりてふるひゝからうしてしうのみねとなんいふに至ぬ 人々はやなかはくたりたるもあればやすらふほとなくいさりをぬるに 木立しけりそひていよくみちもみえす 人のもてゆくまゝにまかせつゝ 山あひのすこしなたらかなる所にいてぬ ちかきわたりにものし侍る正永のはらから 子ともあまたもたるか跡ともに皆引くしてこゝにはしりきたる うち見やれと物もいはれず たれもたれもいける人の色なくめのみおほきつなりて涙さへいてこす 老たる人をみやれはいとゝほけくとして人のうしろにひたと取つてなきあたるおさなきものはかく人々のさまよひありくをめつらかにをかしとおもふかや 人にいたかれてたはふれつゝゑみあたるもいとゝ哀なり ましておやにてこれを見たらんいかとおもひやらるゝは身をはなれぬ物にこそ 何事もおもひたまへわかすなからかゝる事をふとおほゆるは猶うき心は何事もおもひわかさりしおりよりも中々あさましくかなしき事いはんかたなし かくてもあられすとてはた むかひの山にのほる これは芝のみ生たる山にてたよるへき木かけたになく れいのたすけられつゝ夢のたゝちをゆくほと

事とおこなはせ給ひしかは ことなくやみ侍りしとぞ承つたへ侍る これも今きこしめしたてまつらせ給はざる事や侍らん かゝるみやまの下草さへしもほとくにつけて願たて侍るものをとて 我たのもし氣に したとくいひてまた経うちよむを聞ゐたる 外のかたにおのこもの声して今なん浅間山くつかへりて爰もとに來るぞ とてさけひわたる 人々あしをそらにていつちに行てたすかりぬへき命とおもひわかす われか人かにたすけられつゝからうしてうしろの山に至ぬるほど さらにいはんかたなしこゝらなけき侍る中にとしおひたる人の 今ひときはうれへ侍りていのちつれなくてよはひの末にかゝるめ見つる事よ とて水無月のすゑつかたより外にもいてす めりこめのうちにのみ侍りしを 何事もおもひ給ひわかすなから此人を先たすけ出しつゝあとにつゝきてのほり侍る たれもく心たましゐなく 道とおほしき所はゆかてたゝたてさまに松かね岩かねにとりつきつゝはひのほる まして女は心のみさきにたちて ゆけともくおなしところのみにある心地してさまよふ やうく人にたすけられつゝのほりぬるほどに さりともいかなりぬるにやとおそろしさねんしつゝ しみて見かへりぬれば家とおほしき物も任なれし里もなくてめのをよひぬるかきり すみをなかしたるやうにて いかなる物にかあらん こゝかしこにほのほ

に草津とかやいへるところにしる人ありてかゝる事聞侍るとてあをたなともたせて人をこしければ先 老たる人をのせて我ものりつゝ たそのりね ともいはまほしかりしかかの所は出湯ある所ときゝしかは ゆあみする人あまた侍らんに かゝるうきめみつるはいかなるものになんと人にみられんもあさましくはつかしくて おろしこめてゆく 今も猶なりとゝろくをと 耳をつらぬくやうになんすたれをたてこめてゆくに 人あまたして経よむゑたからかに聞ゆ なにならんとやをらさしのそけは 僧あまたうちならひてそらにむかひうちあけくよみぬるなりやうくかの所に至ぬれば あるし出むかへつゝねもころにもてなして 浅ましくめつらかなる事を かゝることなんいまた聞もつたへ侍らす ましていかなる心地かしたまふらんなどいふ こゝにあるかきり皆正永のしる人にしあればつとひきて たれくもおなしさまの事をのみいひつゝくるもうるさし こゝも猶 たへすゆすりみつるに出湯の龍のおとさへひゝきあひていとかしかまし いゐなともてきてすゝむれと見もいられす おひ人にすゝめなとしてあるほどに はたいかめしうなる(りカ)とゝろくかたへのものゝいふやう こゝの山も此夏比よりなり侍るとて ところの人をそれ侍るとかたるを 今なん聞つけつといふ かゝるをりは誰かいふ事ともなくてよからぬ事も

いひいつるものなれは あるかきりさかしき人なく又いかなる事にかと心もとなし あかつま山も昔けふり立しときくこも彼山のふもとにしあればさる事もや などやうくいひさはく 外のかたにもあはたしけに何事かいひつゝ行かよふ あるしきたりて 此ころもゆあみするものゝ 此おそろしきにたへて皆ちりうせ侍しか 猶残侍る人々もえあらてふる里へかへり侍らむとさゝめきあへれば何事もあはたしなくて といひすてゝいぬ 又此所にすめる者もたれかれはやたちのき侍るなどいへは あはたしなくこゝにもあられし はないうちへかいかわ ひんかしのかたはしたしきしるへあれと 道も絶ぬれば北のかたへこえ侍るへし さりとてかくあまたひきくし侍らんも道のほともおほつかなくおもひ給へは先 何かし立こえさるところかまへて迎てん しはしこゝにとまり給へなといへとはらからのおもとさらに聞いれす かくうき事も諸ともにありてこそ のこり侍らはしに侍らん いかなるところにも此なりひくをとの聞へこさらんかたへともなひ給へ道にていかになりはて侍るとも さらにうらみ侍らしとて立出ぬれば 我のみ残へきやうもあらねは またこゝをさまよひいぬるほとは日もしににたふきぬ たそかれのほとに野原をうち過て山にさしかゝりぬるに日もくればてそゝろに物すこういと心ほそし よひ月のほとなれとそら

ももへす 水の中より引出たらんやうなるをうちよりくさしくべて とかうしてもえつきぬれば人々はやこゝにより給へなといへとみにかはもあけられ侍らねと すこしおほゆる事とてはわれこゝにてはかなく成なは故郷にものし給ふ母の聞つけて いかばかりなけき給はん 此世にて今一めま見へまいらせはや はたこゝらの人々もいかにまとひ侍らんと思ふにぞ 思おこしてこくうそうほさち あみたほとけをねんし奉るおりに やうくいきいつるほとおりたくしはのもとに はひよりて ぬれにぬれつゝはるくきぬる衣をほしなとするほと 猶をくれし人々きたりてそこかしこに打より 火をたきてほしあへり かゝるにあらくしきおのこふたりみたりきたりていかでか かゝる道をはこえ給ひし 鳥たにやすくはかよひ侍らぬものをといふをみれば小田にたてたらんものゝやうにて けに鳥もおとろきぬへき こゑしてさきにこえ給ひし人の はや行てたすけまいらせよとの給ひしかはかくきつるなり いさゝせ給へときこゆれとうきこへうもおほえす さりとて愛にとまらんやうもなければ これらにたすけられてそこともなくはたさまよひ出ぬ 今はいつこをさしてかゆかん 此ひゝき聞えこさらん所にいさなへかしといへはさはおほよそ甘里あまりかはとは にしひんかしへもとゝろきぬへし 地のすちをひけるかたは百里越ぬともとうす

うちくもりて いとゝやみちをゆくに猶も夢かとのみたたるゝ いみしく道ほそくしてしたは谷のうもれ水なかるゝをとほるかに聞えたり 氷をふむ心地して あしを立へきやうもなき岩のはさまくをはひわたりてゆくほと言葉にもつくしやらす 雨さへ降きぬ さるようゐもあらねは笠もとりあへす ぬれにぬれてのほる 岩ほをつたひつゝゆくほと何の色めもわかねと ひたりみきりにおほきやかなる木ともの枝うちしけりたるあひたを分つゝゆくからうしてしれぬ ちかくおほしき比 峰のかけはしわたりぬるに 又いみしうなりいてゝふむところもとをりぬへうゆすりきつ 猶さめやらぬ心地してまどふに 鳥のこゑたに聞えぬ山中にして夜の明けはつる比 雨とゝもにひゝきもやうくしめりぬ 今そかうしてゝねんしあへす木のもとにうちふしてはやたへす成にて侍り こゝにていかにもなりはて侍らん 人々はうちすてゝこへ給ひねといひつゝふしぬ 身はひえかへりわなゝかれてこゑうちふるへ物も聞えやらす さこそ侍らめ誰々もかうして侍るとて皆そひふしたり さるおそろしき山なれば馬さへかはす のるへきものもあらざれば 老たる人をもあをたにのせたるか跡にをくれしとあまたしてこゝにかきゝぬ又つい松とほしきたりしかは 人々神仏のたすけ給ぬるはとて 草木取あつめつゝたきつけぬれと露にしめりてふと

へければ 此うれへなき所はいかてもとめん おほしよるよすかや侍るときこゆ けにさりや信濃なるしふ湯といへる所にゆかりありけるを思ひ出て 是なんほとはさまて遠からすといひあはせて かしこに心さすにも行へき道なしいはらからたちやうの物のみあしのふむ所をしらす おそろしき木草しけりたる所を かの男先に立 こゝかしこたよりあるかたを 分にわけ入てあなひすれと 行なやめるさまとも あさましともいはんかたなし 誠や みたれたらん世に 女わらはへのかゝる山おくにさまよひありきしことは むかし物語にきゝつたへしに めのまへにかゝるうきめをみることいかなるむくひにもあらん 先の世いふせくなん やうく跡なき道をもとめいたしてかの所にいたりつ けにこゝはすちことにてひゝきも遠さかりぬれば人々心おちめていきつくこゝちす こゝにとゝまりて日数をふるに やうく山もしつまりぬといひあへれと あまの子のやうにてかへるへき宿もなし かくて物するほとおもはすなるつめてなから せんくはうしにまうてゝ年ころねきわたりし仏をおかみ奉らんと思ふ心つきぬ されといたくかうしたれば しはしつかれをやすめてこそとあかしくらす 只つくくゝと夢のやうなることを思ふにも常なき世のことほりもかゝるうきめはためしすなく かく山おくまでさすらひきぬる有さま いつこを宿とさため

ぬるいと心ほそく かくゆゝしきことは たはふれにも  
とむへきにあらねと めにちかくあさましくむくつけき  
こと みつからもかつはめつらかなれば 後にも人につた  
へきかせんと はかなきすさひにかいやりするのみにな  
ん

## 「浅間記」について

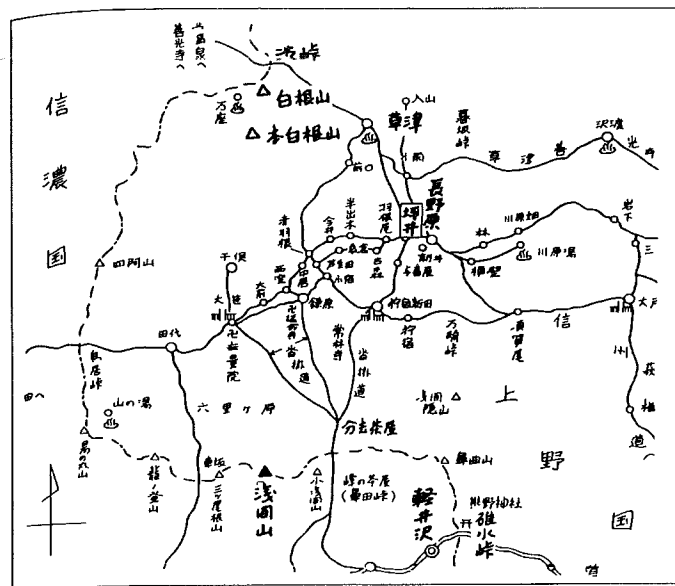
古屋 祥子

東京桂の会で読み進めている『片玉集』（『江戸期おんな考』第十三号参照）の中には亡き人を悼む文や、紀行文、季節の移ろいや人生観などさまざまな文章が収録されている。その中の一編「浅間記」は天明三年の浅間山噴火の災害の体験記で当時の噴煙や泥流の様子、避難のさまなどを克明に記したものである。

### 浅間山の噴火

浅間山は群馬県と長野県の境に位置する標高二千五百四十二メートルの活火山でしばしば活動をくり返し、噴火によつてその山容が変化して二重式、三重式の火山となつていく。

天明三年（一七八三）七月八日、きわめて激しい爆発が起り、大量の巨巖を含む溶岩流が浅間山北斜面を流れ下り、上州の鎌原村（現在の群馬県吾妻郡嬬恋村鎌原）を直撃した。火砕流は吾妻川に流れ込み、泥流となつて下流の村々を襲い、千数百人の死者を出した。さらにそれは利根川に入つて流下し前橋、伊勢崎などの川幅の広いところには沢山の死者が打ち上げられた。そして利根川から太平洋



『天明三年浅間山噴火史』を参照

にまで流れ込んだ。また噴煙と共に吹き上げられた火山岩や火山礫の被害、降灰、降砂による農作物への被害も大きかった。さらに噴煙の影響による冷害、凶作は大飢饉をも引き起こした。

### 「浅間記」の成り立ちと作者のせ

作者は三十幅三集巻之八片玉集に「るせ 坪井正永妻」とだけ記され出自は不明である。そこで同じく『片玉集』中にあるせの姉さよが妹の文を残すため津村（圓）涼庵の記した文章「坪井集序」があるのでそれより引く。

#### 坪井集序

今井氏の両女姉はさよ妹はるせ 姉は武州豊島郡根岸村住佐藤徳明に嫁す 妹は上州吾妻郡坪井村住小林正永に嫁す 姉妹共に和歌を好て吟詠数多に及ぶ 妹寛政二年十月十八日病て江戸浅草柳橋の宅に死す 死するの日辞世の歌二首あり

きのふけふぎゆる待まの露の身はうき世になにをおもひおくへき  
つるにはとおもひし道もおもひきやけふをかきりのゆふへなりとは

#### 圓 正恭しるす

これによれば坪井は上州吾妻郡坪井村、現在の長野原町

坪井にあたる。その住人小林正永という人物を調査したところ、小林家はこの地方の分限者で、代々助右衛門を襲名し、酒造販売、金融を行なっていたとのこと。正永（生年不詳、没年一八〇四）の代には江戸に店舗を構えて大名、家老相手に金融を業とする豪商であった。最初の妻を亡くした（一七八〇）後、江戸横山町、今井氏よりるせを後妻に迎えている。

ここまで判明したとき、東京桂の会の倉本京子さんより小林正永の文章を見出したことを知らされ、間もなくそれを送付された。『片玉集』巻五十八の「日光山紀行」である。この文により正永の足取りから、るせとの関わりある部分を拾ってみる。

小林正永は寛政二年（一七九〇）かねての念願であった日光東照宮へ詣でている。九月五日に江戸の柳橋を発つて十九日に日光参拝を果たし、その後は往路を戻らず、故郷上州の坪井村へ向かう。途中二十四日には高崎の知り合い福田家へ立ち寄る。ここは親戚に当たるらしく娘、孫らと五年ぶりの対面をしており、江戸から妻るせの手紙も届いている。るせは病氣のために日光詣でに同道できないことを嘆き、月夜の折に詠んだ「秋の夜のくまなき月は日の光」という日光山に照りまさるであろう」と歌を送つて来ている。それに対して正永は、「そんなに嘆くことはない、ま

た機会もあるのだから」と慰め、自分は長年の思いがかなってありがたいことだと返歌を送っているが、この後、世の病状が悪化したらしく返事は来なかったと記している。正永が坪井へ着いたのは九月二十九日、五年ぶりの帰郷で、こちらの仕事も山積していたのであろう。帰郷のその翌月、十月十八日に、世は亡くなり、正永はその死には立ち合えなかったのだった。

作者の世の経歴は今井氏の娘とあるのみで、今井氏についてはよく判らないが、この今井氏のことを森統三が著作の中で「今井氏は涼庵の最初の師ではないか」といつている部分がある。

涼庵は右自序（片玉後集自序）の中に、自分と最も深い交渉を持った師友数人のことを叙してゐるが、その最初に就いた師の今井某といふは、市井には珍しい隠逸の士だったらしい。かやうな人のことはつとめて聞明したいものと思つてゐるけれども、この人に就いては外に全然知るところがない。ただ大田南畝が手写して『三十幅』の内に収めた「片玉集抄」の中には今井氏の両女、さよ、るせの姉妹の仮名文各数篇があつて、その文がいつれもめでたい。この今井氏といふは、或は涼庵の師の今井某のことではなかったであらうかと思はれる。（『森統三著作集』第七巻 津村涼庵）

しか つるにたいめなくしてなき別と成ぬるもかへすく口おしく おとこの正永もかみつけの国にもものするころにていかに心ほそかりけん こゑをたにきかてわかれたま（霊） やいつくにさすらふらんと思ひやるもいとかなし（さよの文）

自分も重い病の最中、最後の別れもせず妹のるせを失つて、さよは嘆き悲しみ、心身ともにうつろに過こして、亡き人と思う心を歌に書き連ねていった。妹のいない柳橋の家を訪うのも物憂く、足も遠のいていたが一年を過ぎてようやく夫の正永がひとりでどんなにか心細かろうと思ひ、立ち寄つてみた。

今さらに袖ぬらしけりなき跡のありしすまをけふはとひ来て はた かのおみおきしほうく（反古） ともとりあつめ まさゆき（正恭）のぬしにみせ奉れと正永のもとよりおくりこしかは ひとつくひらきみてあたになときえのこりけんかきつめてみるもなみたの水くきのあと（さよの文）

柳橋の家は、るせ亡き後も正永がなお住み続け、庭の草々も花を咲かせていたがなんとも淋しい景色であつた。そこでさよは正永からるせの書き溜めた文の数々を師である正恭に見せてほしいと頼まれた。

さよは、するの世にもしのばれるような形見としてとど

る。せは寛政二年（一七九〇）十月十八日に浅草柳橋の宅にて病死と記されている。この時には恐らく三十歳を過ぎたばかりではなかったろうか。正永に嫁いだのか二十歳（推定）とすれば、その五年目に浅間山噴火（一七八三）に遭つて江戸へ戻つており、三年後に病を發し、なお三年を病んで、計十一年を経たことになり三十一歳となる。

『片玉集』中にはるせの姉さよが亡き妹を傷む文章が納められており、いささかるせの身辺を知ることが出来る。

るせは兄弟四五人のうちでも年齢の近い姉のさよと特に気が合い、嬉しいことも悲しいことも包まず語り合い慰め合う中であつた。成人して姉は根岸に、妹は上州に嫁いで会うことも殆どなく五年が過ぎた。そして彼の浅間山の噴火が起こり、その再発を恐れて、るせは故郷へ戻つた。姉は「災難のまぎれもかつはうれしく」と根岸の里に迎え、以前にもまして睦まじい日々を重ねていた。三年ほど過ぎた正月頃から、るせはわずらいだし、日毎に弱つていった。六月には暑さを避けて柳橋の川沿いの家に移り療養するが、はかばかしくないままなお三年が過ぎ、寛政二年の三月に母が逝き、同年の十月に、るせは亡くなった。その折の様子さがさよの文章に見える。

我はた むねをなやめるころにて かしらをたに えもたけねはなをおほかなくたま〜におもひみたれ

めておきたいと、託されたるせの遺稿を取り出して読み返す中で、共に過ごした折々の、花や鳥や、また雪などにつけても亡き妹が偲ばれて、妹の心も言葉もすべてか、良かったことはかり思い出されるのだつた。その中でも浅間山の噴火に襲われた折のことを細かに書き付けた文は、その折のありさまが強く思いやられて魂も消え入るような心地がするのだつた。このようなひどい目に遭つたばかりに妹は病にかかったのだらうと哀れで、たいそうつらく空しい思いではあるが、ようやくその遺文を取り集めて形見にしたいと津村正恭（涼庵）師に相談してまとめることになった。このようにして正恭の序（前述）が添えられ「浅間記」一篇は世に残り、『片玉集』の中に納められた。

#### 「浅間記」の概要

話題にものぼらない遠い昔から今に至るまで、絶えることもなかった浅間山の煙ではあるが、特に人目を驚かすほど凄まじく立ちのぼり、空も見えなくなり日は遮られて、砂が降り積もる。噴火の音は至るところを揺すぶり、岩も山も覆るようにとどろく。それだけでも恐ろしいのに風が勢い雨が繁くなり雷鳴まで加わつて、これが何日も続いている……。

まず真に迫る文章で始まる「浅間記」は一貫してその恐

怖を書き綴る。数ヶ月前からのこの徴候に人々は心静かにまどろむ夜もなかったとあり六月（旧暦）二十八日の朝を迎えたところから日を追うにしたがつて激しくなるその様子が伝えられる。

二十八日の朝は昨日までの日々に増して、更に空が不穏となり、くる雲が覆い、雨が激しいので戸を差し固めている。雷が落ちるように聞こえるのは石が降るからだというので戸を少し明けて覗いてみたところ、全く恐しい光景に寒気を覚え、この先どうなることかと思いやられる。前例がないのでここを立ち退くべきかどうか定まらず、波風に揺れる船のうちにいる心地、と苦しく耐え難い思いを述べる。

月が変り文月（七月）はもう秋に入る。前栽の萩もすきも雨に倒れ伏し木立ちも折れるばかり、都からは離れたこの住まいではあるがなかなか風情があり、時には都の人の訪れもあったのに、今は松風の音さえ聞えない騒ぎで嘆かわしいことばかりと記す。

七日になるが七夕の星の逢瀬も見られない。垣を隔てて住む人が訪ねてきて同じような嘆きを言い合い、歌を詠んで星に捧げようと言いついては「待七夕」隣人は「七夕雲」正永は「七夕霧」と三人三様の歌を作る。恐ろしく不安な状況の中に、それを紛らすためとは言え歌を詠み合

こへ給ひね といひつゝふしぬ 身はひへかへりわな  
なかれてこゑうちふるへ物も聞こえやらす

「ここで自分は死ぬかもしれない、皆さんは私を置いて先に言つてほしい」といえば、「疲れているのは同じ」とみなそこに寄り添い、火を焚いて濡れた衣を干したりする。やがて遅い男たちがのぼつてきて聞く。「この恐ろしい道をどうやって上つたのか、鳥でさえ簡単にはこえないのに」みれば田に立てた稲架のように垂直で、これでは鳥でも難しいことだろうと驚きを記す。

しかしここに留まるわけにも行かず再び歩を進め、思いついて信濃の渋湯（長野県下高井郡山之内町）を目指すことにする。この行く手も困難を極め、道もなく本草の茂るなかを分け、茨やからたちにあしをとられながら、前世の何の報いによるのだろうかと思いつつようやく目的地に至り着く。

ここで日数を過ぎすうちやつと山も静まったが帰ろうにも住む家はない。しばらく落ち着いて考えるに、思いがけないついでながらここまで来たからには、信濃の善光寺に詣でて年来の願いであつた仏を拝みたいもの、と疲れの癒えるのを待つて参詣する。そして思えば夢のようであるが、このようなひどく惨いことはめつたにないこと、後の世の人にも伝えておきたいと思ひ筆をとつたと結んでいる。

う風雅、不断に身に付けたであろう教養が偲ばれる。この夜も山に炎が燃え上がり峯から落ちてくるように見える恐ろしさ。

八日、暗雲は一層激しくなり日の光も見えない。山鳴りは絶え間なく、全員が集まつてもこの前例のない状況を判断できる者もおらず、神仏を念じている。そのうち「浅間山が覆つて倒れてくる」と男が叫んだので人々はどちらへ行けば助かるかと、足も地に着かず逃げ惑うばかり。自分も人に助けられてやつと山へのぼり、振り返ればいままであつたはずのわが家も里の風景もなくて一面に墨を流したように見える。泥流に埋まつたのであろうが当時は何事か全く判らなかつたようだ。たどり着いたところで近くに集まつていた正永の親族たちが子供らとともに走り寄つてきた。誰も生きた色もなく物も言わず涙もでないありさま、その様子を伝えている。

この後知人の迎えを受けて草津（群馬県草津町）へゆくがそこも安全とは思えず、どこか山鳴りの聞こえないところへとあてもなくまたさまよい出る。日も暮れて闇の中の山越えのすさまじさ。雨も降りだし、薄水を踏むように岩を伝い木の根を分ける。夜明けごろ雨も鳴動も静まつたが身は疲れはててそこに倒れ込む。

こゝにていかにもなりはて侍らん 人々はうちすてゝ

かなりの長文ではあるが内容が特殊なので途中で飛ばして読むことができない。日を追つて情景と作者の心情が細い交ぜに再現されており、迫力あるドキュメンタリーを読む思いである。

天明三年の浅間山噴火は、その被害の大きさにより人々を驚かせ、多数の記録が残された。また村役人や藩からの調査もあり絵図なども画かれている。

杉田玄白の『後見草』、伊勢崎の布施磯右衛門写本『浅間山大変記』、羽鳥一紅『文月浅間記』そのほか記録の多さはこの時期（江戸後期）に、まとまつた文章の書ける人が地方にも増えたことによるものであろう。なかでも羽鳥一紅は浅間山より東南に当たる高崎の地にあって、その噴火に遭い、振動や噴煙による暗闇の様子、降砂などを経験しており、なお他人からの聞き書きも交えて文章を綴っている。

『浅間記』の作者のせは浅間山の北側、噴出物が高スピードで流れ込んだ吾妻川の左岸に住居があり、黒雲、鳴動、風雨、火柱などに加えて泥流に襲われ、ようやく逃げ延びた生々しい体験が記される。『文月浅間記』を除いては伝聞の文が多い中で直接体験を綴つたものは大変貴重である。殊に最後の部分では、上州と信州を境する白根山（二一三八米）と横手山（二三〇四米）の中間に位置する渋峠の付

近を越えたと考えられるが、ひどい難所と想像される。現在には志賀草津道路（有料）として整備されている所である。

記録によればこの地方（旧坪井村）の流出二十一軒、流死人八人、馬十八疋（長野原町誌）とあり、その中には小林家も含まれると思われる。小林家の敷地跡といわれる所は長野原町中央小学校になっており、このほど屋内体育館・プール施設の建設にあたつて試掘調査を行なつたところ、屋敷関連の施設が見つかった。大きな石を用いた立派な石垣の一部と土倉、納屋などで、分限者といわれた小林家の富裕を物語るものである。なお酒の醸造用水に関わる施設と考えられる溝なども、かつてはあったといわれている。（今は整備されてしまつて無い）

小林家代々の墓地は旧屋敷のすぐ近くに今もあつて、正永と前妻の墓碑も存在するが、る・せの名は見当たらない。る・せは災害後江戸へ戻つて、柳橋の地で終焉を迎えているので恐らく生家の今井氏の墓地に葬られたと考えられる。

今井氏のことは現在までに未だ調べ当てることが出来ない。なお「坪井」は現在、群馬県吾妻郡長野原町大字大津の小字の地名となっている。

#### 〔参考文献〕

- 『群馬県吾妻郡誌』吾妻教育会編・発行 一九二九年
- 『長野原町誌』上・下巻 長野原町誌編纂委員会 一九七六年
- 『天明三年浅間山噴火資料集上』児玉幸多外著 東京大学出版会 一九八九年
- 『天明三年浅間山噴火史』萩原 進著 鎌原観音堂奉仕会発行 一九八二年
- 『新考 文月浅間記』徳田 進著 芦書房 一九八五年
- 『角川日本地名大辞典』10 群馬県 角川書店 一九八八年
- 『浅間焼けの古文書展目録』群馬県立文書館 一九八三年
- 『天明の浅間焼け企画展』群馬県立歴史博物館 一九九五年
- 『天下大変 資料に見る江戸時代の災害』国立公文書館 二〇〇三年

群馬県勢多郡富士見村原之郷 一一二四

TEL・FAX 〇二七―二八八―五六〇一